群教セ	F01 - 01
	平15.211集

「授業改善」と「カリキュラムの充実」に向けた「自己点検ノート」の作成

――生徒の成長を願い、教員としての目標を見つめて――

長期研修員　山本　徳幸

《研究の概要》

本研究は、「授業改善」と「カリキュラムの充実」に向けて、教員自らが、客観的にそれらを評価する方法を探り、その開発に取り組んできたものである。具体的には、「授業」と「カリキュラム」の両者を評価すると共に、教員が教員としての自分を顧みることができる内容を盛り込んだ「自己点検ノート」を作成した。特に、「授業評価」では、生徒による評価も加え、「生徒の学ぶ意欲の高揚」につながる評価となるよう作成した。

【キーワード：教育課程　授業分析　教師像　学習態度　自己点検】

Ⅰ　主題設定の理由

1　学校での評価（学校経営）への取組状況からの視点

各学校においては、「カリキュラム（教育課程）評価」という大きな観点からその必要性は唱えられていたが、より完全な形での実施には至らなかった。多くの学校で行われてきた評価は、各校独自で作成した評価表（学校経営評価）を２学期末からを目安に配布し、質問、記述または評定方式により実施してきた。集約後は、年度末や次年度当初の職員会議に提示されていたが、エネルギーを投入した割には、改善に向けての有効な資料として活用されていなかった。特に、この評価を行う頃は年度末にも近く、職員の雰囲気の中に、「１年を過ごすことができた」という成就感と安堵感が漂いがちであることも影響していたと考える。

新学習指導要領では「特色ある学校づくり」の推進に向けて「新教育課程の実施と管理」を求めている。「特色ある学校づくり」のための「カリキュラムの編成」は、全職員の大きなエネルギーによって生み出されていることは疑いない事実である。しかし、学校組織の中では、苦労して作り上げたものが一旦できあがってしまうと、固定化されやすいという体質もまた持っている。したがって、教員が「特色ある学校づくり」に向けた「カリキュラムの編成と充実」を目指していくには、「自校のカリキュラム」に対してを望ましい「改善」が図れるよう「適時の評価」をする機会を持つことが必要となる。

「カリキュラム評価」を実施する際に考慮しなければならないことは、単に「自校のカリキュラム」を評価しておけばよいというのではない。必要とされる「評価」は、その「カリキュラム」の下で行われている「授業」に対する「適切な評価」も含まれる。「授業」は、各学校の「教育目標」の達成と「目指す生徒像」の具現化のために、教育活動の中で最も大切な位置を占める。なぜなら、「授業」は教員が生徒と共に創り上げていく活動だからである。「教育目標」に迫るためには、何よりも「授業の充実・改善」に向けた手だてを講ずる必要である。「カリキュラム」への「評価」と併せて、「授業」に対する「適切な評価」をしていくことが、生徒たちの「学ぶ意欲」の高揚へつながり、「目指す生徒像」の具現化にもつながっていく。

本研究では、これら二つの「評価」対象について、適時、適切な「評価」の実施を目指しているが、「評価結果」の信憑性を考慮すると、「評価者」の見識や能力が「評価結果」に影響をを及ぼすと考える。したがって「評価」の実施において、「評価者」の「評価能力」は重要な位置を占める要素であると考える。このことから、その「評価者」となる教員の「評価能力」を高めるための「自己点検ノート」を作成し、教員が「現状の自己」を認識した上で、改善に向けた「評価」が実施される研究も同時に進めてきた。

「カリキュラムおよび授業の充実・改善」を目指していくには、教員各自の「現状からの進歩・発展」という「意識の変容（教員としてのプロ意識）」を促す必要がある。すなわち、プロの教員としての望ましい変容をしていくことによって評価能力は高まっていく。また同時に、生徒たちの「学ぶ意識の高揚」に結びつく授業を見出すための「評価」方法の確立も必要とされると考える。

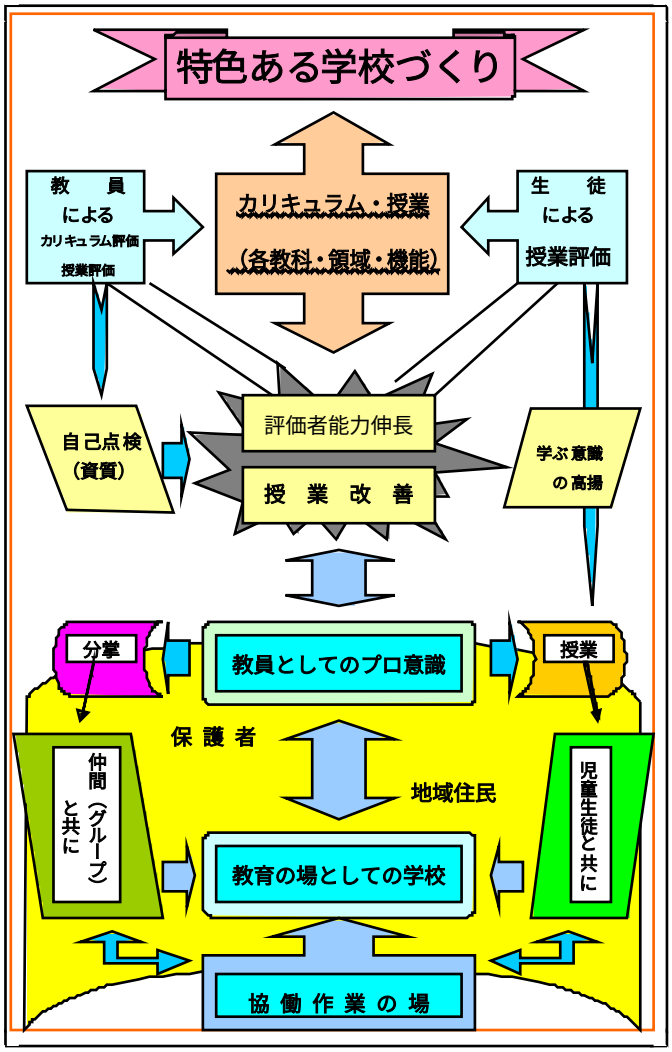


図１　研究の構想図

本研究においては、「カリキュラムの充実・改善」に結びつく「評価」の方法と、「教員の授業改善」に結びつく「自己点検」の実施方法を構築すると共に、それらへの点検・評価を具体的に実施するための資料となる「自己点検ノート」および「別冊：教員と生徒による授業点検シート」を作成していきたいと考え、本主題を設定した。

2　群馬県の動向からの視点

本研究は、群馬県の教育行政方針に沿って進めていこうとするものである。

3　各答申にみる「特色ある学校づくり」と「評価」の視点

中央教育審議会

第一次答申（平成８年７月）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
第二次答申（平成10年９月）「今後の地方教育行政の在り方について」

教育課程審議会

平成10年７月答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」
平成12年12月答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」
第４章「教育課程の実施状況等から見た学校の自己点検・自己評価の推進」から

本研究は、国の施策にもの即した研究価値の高い課題であると考える。

Ⅱ　研究の視点

各学校は、掲げている「教育目標」あるいは、「目指す生徒像」を達成させるために、「授業（教育活動）」を通して生徒の「学ぶ意欲」を育成している。目標の達成に向けては、「計画(P)→実施(D)→評価(C)→改善(A)」のマネジメントサイクルにしたがった「教育活動」の実践が必要である。

この観点から各校の「カリキュラム」を考察すると、「特色ある学校づくり」に向け編成された「カリキュラム」の多くは、一昨年度あるいは昨年度の「教育内容」を踏襲していると推測される。つまり、同サイクルに当てはめると、「計画（Plan)→実施（Do)」の段階を、本年度多くの学校が繰り返していることを意味している。こうしたことから、「Ｐ→Ｄ」に続く「Ｃ→Ａ」段階の「評価（Check)」を実施することが、今後の「カリキュラム編成」をする際に重視されることは明らかである。

各校は、次年度に向け、今年度の「カリキュラムの評価と改善」を行い、より学校の実態に即した「カリキュラム編成」の作業に取り組むことが予想される。改善に向けた「評価」をする段階で、「自校のカリキュラムの内容が充実したものか、否か」を判断する方法を本研究で提案することができれば、各校とも地域や生徒の実態に合わせた「カリキュラム編成」ができると考える。

また、この「評価」と共に、教員が「授業改善」に向けた「評価」や自身の「姿勢や態度（教員としての資質)」についての「評価」を実施する機会があれば、教育者としての自覚が高まると考える。すなわち、「カリキュラムおよび授業の評価」の実施と、「教員の自己変容につながる自己評価」の実施は、「教員の持つ資質」を向上させることができ、それは生徒に還元され、生徒の「学ぶ意欲」につながっていくと考える。

Ⅲ　研究のねらいと研究仮説

本研究では、次の「ねらい」を達成していきたいと考える。

ね ら い「自己点検ノート」の作成

○自校の「カリキュラム」および自らが行う「授業」を評価（自己点検）する方法を確立していく。

○生徒の「学ぶ意欲の高揚」につながる「授業評価（自己点検)」の実施を通して、生徒と教員、双方による「意欲的な授業」が展開される授業を見出していく。

○教員の「意識の変容（教員としてのプロ意識)」を促す「自己点検」を実施し、「評価者」としての能力を高め、「改善」に対する意識の高揚を図っていく。

本研究の「ねらい」を達成させていくために、仮説を設定し、その検証を図る方針である。

研究仮説

「カリキュラム」および「授業」の充実・改善に結びつく「評価」の実施において、教員による「教員としての意識の高揚」に向けた「自己点検」と、生徒による「授業点検」を通して、自らの実践や取組を自己認識していけば、「教員としてのプロ意識」が高まり、効果的な教育活動の実施が図られ、「ねらい」を達成することができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　「カリキュラム（教育課程）評価システム」の構築

(1)　評価対象となる「カリキュラム（教育課程）」の内容

学習指導要領解説（総則編）には、「カリキュラム（教育課程）」について「学校において編成する教育課程は、教育課程に関する法令に従い、各教科（必修教科及びび選択教科）、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間について、それらの目標やねらいを実現するるよう教育の内容を学年に応じ、授業時数との関連において総合的的に組織した各学校の教育計画である」と記述されている。

「カリキュラム」の構成要素は、「教育内容」「組織」「履修」「教材」「授業日数」等があるが、本研究で追求しようとする評価対象は次の通りとした。

「教育課程の編成」
「教育目標との関連」
「主たる担当教科」
「主たる選択教科」
「道徳」「特別活動」
「総合的な学習の時間」
「生徒指導」「進路指導」
「健康教育」「安全教育」

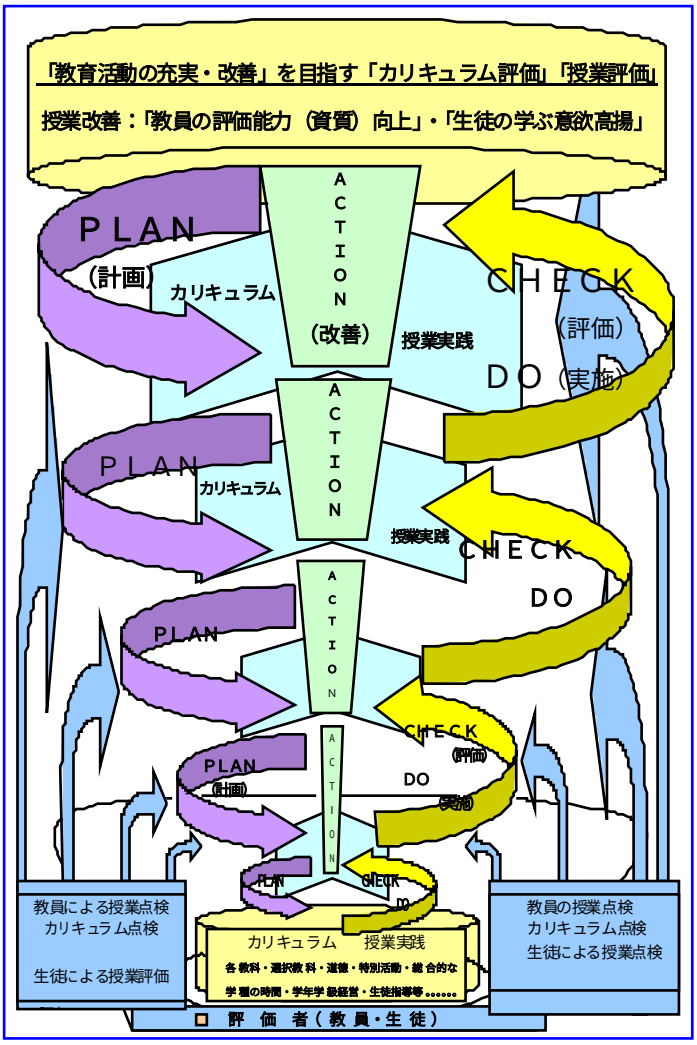


図２　教育課程評価･授業評価システム研究構想図

(2)　「カリキュラム（教育課程）」の「編成および実施段階」への評価

評価対象となる「カリキュラム」については、特に、その「編成と実施」の段階に焦点を当て、評価項目をマネジメントサイクルにしたがい作成し、それに対する評価を４段階で考察する形式とした。点検後、結果は各校でまとめ、次年度の「編成」に向け提案価値のある資料となるよう定義づけていきたい。

(3)　「評価者」の認定

本研究における「カリキュラム評価」の実施については、これを教員自らが行うこととした。

2　「教員の資質向上」を目指した「自己点検」の構築

(1)　教員（評価者）の評価能力の育成

「カリキュラム評価」の評価者は、教員に限定していくことは述べた。しかし、この評価・

点検段階で次のような問題点があることに気づく。つまり、評価対象を評価する段階で、「教員の評価能力を高めておく必要がある」という点である。

「評価」は、その評価者に内在する個人の資質や経験等に依存するところが大きく、「評価結果」もまたこれによって左右される。したがって、評価結果の信憑性やその精度をより高めるために、評価者は、評価対象についての知識と理解を十分に獲得しておく必要があり、評価者として自己の持つ「教員としての資質」について認識する必要があると考える。

(2)　「教員の資質向上」のための「自己点検」

教員の「評価能力」の向上を図るための「必要条件」を追求していくことは、「教員としてあるべき姿（理想としたい姿）」に行き着く。この「教員としてのあるべき姿」を裏付けするものとして「教員の資質」が挙げられる。特に、教員として持つべき「不易の資質」は、多忙な日々の中で埋没しがちである。教員は、自ら身に付けるべき力（資質を獲得する機会）を逸していることもあると考える。

そこで、「不易の資質」について、教員自らが「自己評価」する機会を得ることができれば、「教員としての自分を改めて振り返る」ことにつながり、その職務（子どもたちの人間形成に大きくかかわる仕事）の重要性、社会に貢献している自己効力感、充実感等を感じることができる。何よりも、「教員としてのプロ意識」を自覚することができると考える。

「不易の資質」を自己に内在させ、それを伸長させていくことによって、教員一人一人が「あるべき教員の姿（理想としたい姿）」を追求することができると考える。自らの人生の歩みにおいて「やりがいや生きがい」を持って歩む自分を発見できる意義を本研究の柱の一つとしたいと考える。

3　「授業の充実」を目指した「授業評価」の構築

(1)　教員による「授業評価（自己点検）」

「カリキュラム評価が本研究の重要な課題である。しかし、「カリキュラム」という大きな枠組みの評価を容易に、しかも単純に行えないことは明らかである。そこで、「カリキュラム」の具体的な姿として実施されている「授業」に着目し、これを「評価（自己点検）」することによって「カリキュラム評価」に迫っていく方針を立てた。

教員は、毎日の生活が多忙なため、日頃の「授業」を振り返る機会が少ない。これは、「授業の充実と改善」に向けた振り返りの機会が少ないという意味であり、自らが持つ資質を容易に認識する機会に恵まれていないことに等しいと考える。

一般的には、「授業」を振り返る方法として、校内研修に準じた授業公開や研究会等を開催する方法が考えられる。これらの研修は、教員の授業構想力や実践力を高めていくことができる。しかし、実践についての相互評価の段階で「遠慮や建て前」といった人的風土や第三者である同僚の主観的な意見の伝達といったことによって、授業者の内面まで意見が響かず、「授業改善」につながりづらいこともある。

「授業を変革していくのは自分である」との自覚が、教員一人一人に育ってこそ、自らの「授業改善」が行われる。それには、自分の授業実践を「自己評価」し、「自己認識」した上で、「自分の内なる声」に耳を傾けることが大切である。

自らの「授業」の改善を目指していく姿勢を持つことと、それを支える自分を築き上げていくことが重要であると考える。

(2)　生徒による「授業評価（自己点検）」

「授業」を教員自らが「自己評価」するという教育活動は、必要不可欠な位置づけができる。しかし、教員自身だけによる点検・評価活動だけでは、やはり偏りがあり、適切な「評価」であるとは言えない。

そこで、本研究では、生徒による「授業評価」を導入することを考えた。「授業評価」は、その目的に応じてさまざまな評価方法にしたがって実施されている。しかし、本研究では、生徒が毎日取り組んでいる授業について、「授業の良さ」を生徒自身に振り返えらせ、その結果を教員にも返していける位置づけを考えていきたい。

「授業」を通して、生徒たちはさまざまな知識や技能を獲得している。生徒一人一人の成長を願って実践される授業は、彼らの興味や好奇心を高め、「知る喜び」（理解）や「できる満足感」（達成感）を与えている。こうした生徒たちの「学ぶ意欲の向上」を目指して準備・実践される「授業」で、創意工夫されている点を生徒の視線から拾い上げ、それを教員相互で情報交換の資料として活用できれば、また一歩進んだ「授業の充実と改善」に向けた取組となると考える。

生徒による「授業評価」は、「生徒のやる気」が喚起される「授業」の実施に結びつくことが重要であり、それを目標とした生徒による「授業評価（自己点検）」の実施が図られることが望まれると考え、追求していくものとする。

Ⅴ　「自己点検ノート」および「別冊：教員及び生徒による授業点検シート」の作成

本研究では、前述の「Ⅳ　研究の内容」にも示した通り、３つの「評価対象」への評価方法の構築であり、この３つの「評価対象」への評価は有機的な関係を持たせながら行っていくものとする。

◇	「カリキュラム」についての評価・点検	（評価・点検者は、教員）
◇	「授業」についての評価・点検	（評価・点検者は、教員と生徒）
◇	「教員の資質向上」についての評価・点検	（評価・点検者は、教員）

1　「カリキュラムの充実」を目指した自己評価・点検

「カリキュラム評価」は、学校教育活動の母体であることから、教員各個による評価を集約し、全職員でその充実と改善につながる資料として活用できるよう「自己点検ノート」内での工夫を図った。

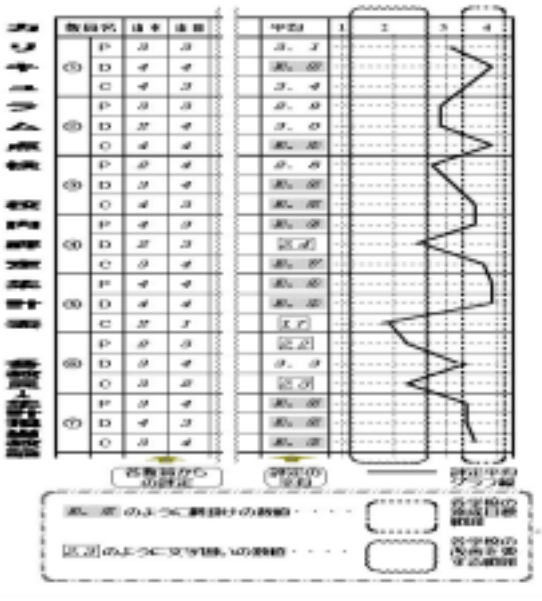
資料１　「カリキュラム評価表」：　自己点検ノートからの一例

点検・評価は、その視点を「編成と実施」に当て、マネジメントサイクルを基調として、点検内容を構成している。評価者（教員）は、評定や意見を記入後、中央部の波線部分から右側を切り取り、カリキュラム編成にかかわる担当教諭に提出するものとした。

担当者は、これらを、資料３のようにまとめ、具体的なカリキュラム編成について討論する資料として提示し活用できる。

集計には、客観的な評価を目指す意図から、数値による評価とする一方で、主観的な意見も汲み取れるように「意見箱」を用意して、カリキュラムが、その学校の総意で創り上げられている意味を確認できるようにした。

資料２　「カリキュラム評価」：　集計表の例



2　「授業改善」を目指した自己評価・点検

「授業評価」については、教員と生徒による多面的な評価が行えるよう工夫を図った。具体的には、生徒は「別冊：生徒による授業点検シート」を活用し、教員は「自己点検ノート」と「別冊：教員による授業点検シート」を活用して授業を評価・点検できるようにした。

(1)　生徒による「授業評価」について

生徒による「授業評価」は、「別冊：生徒による授業点検シート」を準備し、生徒の「学ぶ意欲の高揚」につながるよう授業を肯定的に分析できるようにした。具体的な内容は、自校の「目指す生徒像」を確認することから始まる。これは、学校が生徒に何を期待しているかを伝えることを第一の目的とし、その後、「授業」について「取組意欲」「理解度」「学びの達成感」等を自己確認していく内容とした。

また、心に残る「よりよい授業」に視点を当て、具体的な意見や評価を引き出せるようにした。

こうした「生徒による授業評価」の結果は、少なからず、教える立場にある教員の意識改革につながると考える。すなわち、「わたしの自己点検ノート」によって自らの実践を顧みた結果は、主観的な点検結果であり見方の甘さもある。これに反して、「生徒による授業点検シート」の結果は客観的な他者評価であり、教員が行うべき「授業改善」への一助になると考えるからである。

資料３　「別冊　生徒による授業点検シート」

生徒による評価は、質問項目の内容によっては、教員への批判や授業内容を否定する評価結果を導いてしまうが、それを避ける質問内容を吟味したきた。「評価」の中心となる観点は、授業を通して「わかった・できた・やり遂げた」といった感想で表される「達成感・成就感」とし、生徒にとって「いい授業」を想起させることができる質問内容とした。こうすることによって、生徒自身が、「意欲的な授業には、どのような姿勢や態度で臨んだか」について再確

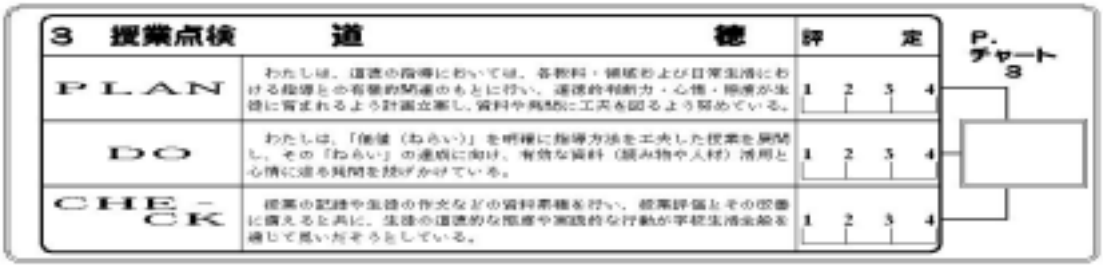
認することができ、今後の授業への取組についての自分自身を模範にすることができるのである。また、評価の結果は、教員自身が行う「授業評価」につながるようにも工夫を図った。つまり、生徒がこの「授業評価」を行うことによって、「いい授業」、「学ぶ意欲が高まる授業」についての「ヒント」を、教員にも提示出来ると考える。教員はこの評価結果から、「どのような授業を生徒たちが望んでいるか」を知ることができ、自らの授業を見直し、改善に向けて努力する「きっかけ」となると考える。

(2)　教員による「授業評価」について

ア　「自己点検ノート」を活用した「授業評価」

教員にとって大切なのは「授業」である。「カリキュラムの編成」の下で実施されている「授業（教育活動）」において求められることは、「自分が持つ力の何を伸長させるべきか」「何を改善していくのか」を的確につかみ、自らの手で改革して、生徒にそれを提供していくことではないだろうか。教員の自己評価は、「自己点検ノート」を活用し、「授業（教育活動）」について、「カリキュラム評価」と同様にマネジメントサイクルを基調としたもので実施するものとした。自らの「授業」をサイクルを追って考察しながら、数字による客観的な視点から「授業評価」が行えるよう工夫した。こうした評価によって、自らが実践する授業のどのサイクル（段階）において力点が置かれているかを把握でき、「授業」の力点の傾向（自己の傾向）を知ることができると考える。

資料4　「授業評価表」：　自己点検ノートからの一例



3　授業点検　　道　　徳		評　定
PLAN	わたしは、道徳の指導においては、各教科・領域および日常生活における指導との有機的関連のもとに行い、道徳的判断力・心情・態度が生徒に育まれるよう計画立案し、資料や発問に工夫を図るよう努めている。	1　2　3　4
DO	わたしは、「価値（ねらい）」を明確に指導方法を工夫した授業を展開し、その「ねらい」の達成に向け、有効な資料（読み物や人材）活用と心情に迫る発問を投げかけている。	1　2　3　4
CHECK	授業の記録や生徒の作文などの資料収集を行い、授業評価とその改善に努めると共に、生徒の道徳的な態度や実践的な行動が学校生活全般を通じて思いだそうとしている。	1　2　3　4

P.チャート3

イ　「別冊：教員による授業点検シート」を活用した「授業評価」

「別冊：教員による授業点検シート」は、「別冊：生徒による授業点検シート」と内容を一対としている。これは、「自己点検ノート」による「授業評価」を補う意味を持っている。具体的には、前述した「生徒による授業評価結果」とつながるようになっており、生徒が「達成感、成就感を味わえる授業」を提示したのを受け、教員は、「自分の授業」がそれに叶う学習内容を提供しているかどうかを確認できるように内容を工夫した。

資料5　「別冊：教員による授業点検シート」

教員は、前述の「自己点検ノート」内で「授業評価」を自発的に行うが、そこには、自分自身への「評価」に対する甘さも表出すると考える。しかし、生徒の「授業評価」と併せて、「別冊：教員による授業点検シート」で自らの授業を振り返ることによって、「自分の授業」を改善

善させる「ヒント」となるように作成した。すなわち、関連を持つ質問項目の中の観点について、「生徒と教員の間で見解を同じにするか、否か」を、自ら見出していくことで、より具体的に「よりよい授業」について教員に「気づかせる」という意図から作成したものである。

3 「教員の資質向上」を目指した自己評価

本研究で目指す教員による「カリキュラム評価」をより効果的に達成していくためには、その評価者である「教員の評価能力」を高める必要があることに気づく。「教員の評価者評価能力」を高める一つの方策として、「教員の資質の向上」という観点で「自己点検システムの構築」を図り、評価者評価能力の伸長の一助としていきたいと考える。

教員としての評価者評価能力

- ○ 実践した授業や教育活動の内容について、否定的な評価ばかりでなく、建設的・発展的な評価を実施する態度を身に付けることが望まれる。
- ○ 自らの授業や教育活動について、反省すべき点は謙虚に反省すると共に、改善等が必要な場合には、前向きな態度での取組が求められる。
- ○ 自己点検・自己評価の機会を得るのと同様、日頃の生徒等への評価活動についても、指導者として、教員として備えるべき専門的な知識はもちろん、社会人としての品格を身に付けていくことが求められる。

(1) 「今の自分」を振り返る自己評価・自己分析

教員としての毎日を、私たち教員は人として、教員として様々な喜怒哀楽の感情を持ちながら過ごしている。そうした日々の生活の中で、人それぞれではあるが、「悩みや迷い」を抱えている。「自己点検ノート」冒頭の部分では、慌ただしい時間の流れの中で、「今、現在」を生きている「自分」に視点を当て、見つめていくことを目的としている。

立ち止まり、落ち着いて「自分」を見つめる時間を確保し、記述式ではあるが、点検者の自由な記述、あるいは図絵の描写によって、自己課題の端緒を見出すために準備した。

(2) 「ＳＷＯＴ分析（外的環境要因）」からの自己評価・自己分析

「自己改革」をしていく過程においては、「目標」の設定と「達成」に向けた「手だて」が重要である。社会の中で、様々な事象についてかかわりを持っている私たちは、自分の周りに存在する人や物（人的・物的環境）を「自己変革」のために役立てていく必要がある。それは、「自己変革・自己実現」に向けた動機付けの意味において極めて重要である。

ここでの「ＳＷＯＴ分析（外的環境要因）」を活用した自己分析は、「自分にとって支援的に働く環境要因を見つけ出し、それをどう活用していくのか」を見出す方法として有効と考え取り入れた。

(3) 「教員の不易の資質」６観点からの自己評価・自己分析

「教員の資質能力」を探っていくために、平成９年７月の「教育職員養成審議会第１次答申」内の『いつの時代にも教員に求められる資質能力』を参考にした。

- ○ 教育者の使命感
- ○ 幼児・児童・生徒に対する教育的愛情
- ○ 広く豊かな教養
- ○ 人間成長・発達についての深い理解
- ○ 教科等に関する専門知識
- ○ これらを基盤として実践的指導力

これらは、教員として自らが備えるべき「教員の資質能力」について、自身が、「自己評価」「自己点検」を通して、「自己理解」「自己認識」していくことは、その後の「自己変革」「自己実現」に結びつくという点で重要であると考える。

６つの観点についての「自己評価」「自己点検」の質問内容はマネジメントサイクルを基にして作成（実際の点検表は、サイクルに順わず配置）した。点検結果は点数化し、レーダーチャートに表せるようにして、客観性を持たせる工夫を図った。

資料５　「教員の資質」把握のための「自己点検評価質問項目」(一例)

例：　1　教育者の使命感

計画（Plan）段階：　点検の導入部

公衆マナーや交通ルールを守ろうとする気持ちや約束の時間を守ろうとする気持ちが強い方である。	1	2	3	4
学校の中ではもちろん、学校を離れても教員ということを意識して生活している。	1	2	3	4

実行（Do）段階：　点検の展開部

生徒の模範となるよう挨拶や礼儀、言葉遣いなどに気を使っている。	1	2	3	4
自分の中に生徒たちを向上させていく理想の教員像があり、それに向かって努力している。	1	2	3	4

評価（Check）段階：　点検の終末部

教員として日々行動している自分を省みて、その結果を生かして生活するよう心がけている。	1	2	3	4
教員という職に就いて働く自分自身に誇りを持ちながら日々生活している。	1	2	3	4

(4)　「ＳＷＯＴ分析（内的環境要因)」からの自己評価・自己分析

ここでは、各教員の心の内側にあるものを自分自身で確認し、点検していけるようにした。

確認の観点としては、「教員の不易の資質」に視点を当て、前ページまでに確認した「６つ資質」を具体的なキーワードを使い、自分に内在する「いいところ」(ますます伸ばすには？）と「力を付けたいところ」(力を付けるには？）のそれぞれを見いだし、「これまで」と「これから」という過去と未来をリンクさせながら、点検していける内容とした。これらを通して、自分の中にある「目指したい教師像」に迫れる自己を認識させ、自己変革に結びつくようにしたいと考える。点検方法は、記述式として、文章化しながら自己確認できるようにした。

記述式にすることによって、自己を深く見つめ、知ることにより具体性を見いだすことができると考える。

(5)　「目指したい教師像」(目標の達成）からの自己分析

ここでは、自分自身が教員として歩もうとする「将来」に視点を置きながら自己点検する内容とした。具体的には、「目指そうとする教師像」に迫っていくために、「目指したい授業」と「育てたい生徒」の二つの観点から自分を見つめ直し、「幸せな人生」に向けたいくつかの目標を具体的に想定し、イメージの中で、各自が見いだした課題を克服していく方策を考える方式を考えた。ここでは、自分自身の職能を高めようとする意欲を育てる機会としていくことが目標となる。

Ⅵ　「自己点検ノート」および「別冊：教員及び生徒による授業点検シート」の活用と考察

ここでの考察は、前述の「自己点検ノート」の活用の中で触れている「教員の資質」の評価・分析内容と順番や内容が異なっているが、これは、実際に地籍校で活用を図った時点でのものであることをまず、ここで述べておきたいと考える。

１　「自己点検ノート」の実施について

(1)　「教員の資質」についての自己点検システム

ア　「教員の不易の資質６観点」からの自己評価・自己分析

質問事項について、類似する記述があるとの指摘を受け改良した。この部分に取り組んだ教員の多くは、積極的に自分自身の資質について知ろうとする態度が見られ、導入部として準備した点では好ましい内容であると考える。

イ　「内的環境要因」からの自己評価・自己分析

「自己の内面を見つめる」ために「記述形式」で作成した。「記述量が非常に多い分析である」との指摘を受けた。この指摘を受け、各観点とも「キーワード」を一定の数にして、評価者が答えやすいものとした。

ウ　「外的環境要因」からの自己評価・自己分析

外的要因については、「なぜ、外的要因分析をするのか」という明確な指示がなかったことがあり、方法の例示をしておくよう配慮した。また、この分析においても、「記述」よりも「数値」で表す方法を勧める意見もあった。しかし、内的要因と同様に、記述によって自分自身および周囲の環境をより深く考える場としていく方針に変わりはなく、記述方式を踏襲した。

エ　「教員としてのわたしの活躍（目標）」に向けた自己評価・自己分析

この分析方法は、自分の将来の「目標」と「その達成」について考える場とした。意見では、割り振ったページ内で、これを有効に表現し尽くされていないことが指摘されたので、上記の「目標」と「達成」を繰り返すことによって自己変革できることを示し、「授業」「生徒」の両者を育てていく手だてを「目指したい教師像」から探っていく内容とした。このため、次の点検となる「カリキュラムおよび授業（教育活動）点検」につながりやすくなったと考える。「過去への振り返り」ばかりでなく、「将来の展望」につながる分析の必要性を提示する意味で準備した分析である。

(2)　「カリキュラム評価」及び「授業評価」についての自己点検

「カリキュラムおよび授業（教育活動）」の両点検については、一つはありきたりの内容であったり、質問内容がカリキュラム部分と授業部分で類似している点の指摘が多かった。このため、質問項目の見直しをすると共に、集計方法に工夫を加え作成した。具体的には、カリキュラムは学校単位で点検し、授業は個人レベルで点検する方針を明確にした。点検時間の短縮と効果的な個人単位での授業の振り返りができることが特徴として挙げられる。

2　別冊「生徒および教員による授業自己点検シート」についての活用

(1)　「生徒による授業自己点検シート」の活用

自分が学んでいる学校の「教育目標」と「めざす生徒像」を確認し、「学校が生徒に期待する姿」を示すことによって生徒の取組がよかったと感じられた。期待されていることを知ることは、この点検の導入部で意味のある形式であった。

点検表の質問項目が肯定的な表現によって提示されたので、この点検表に対して嫌悪感や倦怠感を感じた様子はなかった。

生徒の回答内容に目を通してみると、教員の指導力に直接働きかける意見もあるなど、建設的な考察が、生徒の内面で行われていると感じた。生徒の評価者評価能力についても、肯定的・発展的な質問内容の提示があれば、教員の授業改善につながる資料として有効活用できることがわかった。

(2)　「別冊：教員による授業自己点検シート」の活用

教員用の「授業点検シート」は、その活用についてのデータの数が現時点では少なく検証する段階にないが、生徒の授業点検と合わせて実施することによって、「わたしの自己点検表」

の主観的な点検から、やや客観的に自分自身の授業を見つめることができるという点に有効性を見いだすことができる。このように、「生徒と教員がつくり上げていく授業」という観点でとらえていくと、「別冊：教員による授業自己点検シート」は、「わたしの自己点検ノート」と合わせて実用価値があると考える。

Ⅶ　今後の課題

「自己点検」の方法としての確立はまだ不十分であることは間違いない。そのため、今後内容についての充実・改善をしていく必要がある。

「教員の行った授業評価」と「生徒の行った授業評価」について、より強い体系的な授業改善に結びつくような工夫と方策を見いだす必要あると考える。点検を通した「生徒からのメッセージ」から「よい授業とは」というアドバイスを教員自らが授業や教育活動に積極的に反映させていくことは、大きな意義を持っていると考える。

資料５　生徒と共に取り組む様子

〈参考文献〉

牧　昌見　編著　『改訂　学校経営診断マニュアル』　教育開発研究所（1999）
山口　満　　著　『現代カリキュラム研究』　学文社（2001）
八尾坂修　編集　『期待される学校評価能力』　教育開発研究所（2002）